

特別寄稿

平成29年度地域包括ケア市民フォーラムに登壇された吉田洸さんは平成28年度に登壇された吉田耕得さんのお孫さんです。本吉地方中学校弁論大会で発表された内容をお話いただきました。



想いを言葉にのせて

気仙沼市立新月中学校 3年（発表当時）

吉 田 洸 氏

最近、私の周りではラインをする人が増えています。話を聞くと、学校では全く話さないのに、ライン上では大の仲良し、だということです。私は、不思議に思います。その関係は、本物でしょうか。でも、私自身を振り返ってみると、学校の休み時間に友達と交わす会話は、テレビのことや好きな芸能人のことなど、他愛もないことばかり。そんな関係に、なんだか違和感を覚えるのです。

私の祖母は、3年前、長い闘病の末亡くなりました。体中の筋肉がやせて、力がなくなっていく病気で、手足が動かなくなり、次第に自力呼吸も困難になりました。そして、人工呼吸器をつけることになった祖母は、命と引き替えに声を失ったのです。

祖母とのコミュニケーションは、口の動きを読み取るか、ボタン式のパソコンでした。どちらも声と違って時間がかかります。口が乾く、痰がつまるから吸引してほしい、祖母の苦しみを早く和らげてあげたいのに、分かってあげられないもどかしさ。悲しそうな祖母の表情を見ると、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

三年に及ぶ闘病生活では、病気の不安と、気持ちが伝わらない苛立ちから家族が衝突することもありました。でも、残された力を振り絞って生きようとする祖母の姿を見て、私達も祖母の心の声に根気強く耳を傾けました。すると、口の動きや表情から、伝えたいことが分かるようになったのです。

亡くなる前日、病室に会いに行った帰り際、いつものように祖母の唇にクリームを塗って、「ばあちゃん、また来るね。」

と声をかけました。すると、祖母の顔がぎゅっと硬直しゆっくりと口が動き始めたのです。伝えたいことがある時、祖母は僅かな力を絞り出して、必死に口を動かします。

「……………」

「がんばれ？」

と確認すると、祖母はかすかに頷きました。今考えると、なぜ突然そんなことを言ったのか、自分の死を予感していたようで不思議ですが、祖母は、命がけて私に最後の言葉を届けてくれたのです。がんばれ……。声にならない祖母の思いを、私はしっかりと受け止めました。

私達は、目の前の人に、気持ちを伝えているのでしょうか。自分の言葉で伝えることに、臆病になっていませんか？

「土曜日、買い物に行かない？」「う……………」

「嵐って、いいよね。」「う……………」

自分の本音を隠して、曖昧な返事で周りと合わせることが、私はあります。自分の考えが否定されるのが怖いから。仲間はずれになるのが嫌だから。だから、ラインなどの間接的な道具に頼ってしまうのかもしれない。でも、面と向かって話すからこそ、伝わる想いがあるはずです。

表情が見えるからこそ、相手の本当の気持ちが分かると思うのです。

祖母は、声をなくしても、想いを言葉にのせて、家族に伝え続け、家族も、その想いを汲み取る努力をしました。伝えようとする思いと、受け止めようとする思い、言葉を仲立ちにして、二つの思いが重なり合ったとき、私達は本当のつながりを実感できるのではないのでしょうか。

本当に伝えたい思いは、素直に、自分の言葉で、触れ合える距離で届けたい。相手の心の声に耳を澄まし、大切に受け止めたい。そう思うのです。言葉にのせた思いは、互いの心をつなぐはずだから……。